

『発見！フランス語教室』を使った 日本語で説明せずに意味を発見させる教授方法の トレーニング

平嶋 里珂

HIRASHIMA Rika

Université Kansai

rika3?kansai-u.ac.jp

0. はじめに

『発見！フランス語教室』は日本の高校で初めてフランス語を学ぶ学習者を対象に作られたフランス語の総合教科書である。間違いを恐れず大量に言葉を使うことによってコミュニケーション能力を身につけ、大まかにフランス語の見取り図を理解するという主旨で作製されている。この教科書はまた、日本で製作された教科書としては珍しく、教授用資料に練習を進める具体的手順、注意点などが詳しく記されており、コミュニケーションを主眼とした教科書を使い慣れていない教師や経験の浅い教師でも使いやすい教科書となっている。筆者が担当してきたフランス語科教育法では、この教科書のExpressionsを土台にして、日本語による説明を行わずに各課の基本表現の意味を発見させる教授方法のトレーニングを行ってきた。本稿では数年に渡る受講生の模擬授業での試みを紹介する。

1. 『発見！フランス語教室』の Expressions を土台とした模擬授業の進め方 『発見！フランス語教室』の練習手順

『発見！フランス語教室』の Expressions の作業手順はおおよ次の通りである。1. イラスト観察でテーマを想像する、2. イラストだけ見て速いスピードの録音を聞く（生徒に聞こえたことを言わせる）、3. 遅いスピードの録音を聞く、4. 教師についてリピート練習、5. 文の意味を確認する（生徒に意味を尋ねる）、6. 録音について再度リピート練習、7. つづりを見ながら音読

文法読解中心の授業では通常、文字（例文を見る）→音声（例文の音読）→意味（言語形式の解説と語彙の意味理解）という順序で練習が進むはずだが、『発見！フランス語教室』では、大まかな意味（あるいはテーマ）の確認→音声→意味→文字という逆の順序で作業が進められている。Expressions の段階では文法や細部の意味の説明は行わず、文法要素も語彙と同じく「言いたいことを伝えるための表現形式」として理解させ、何度も表現を口に出しフランス語に慣れることがポイントである¹⁾。

教案作成練習と意味を伝える方法の研究

筆者が担当するフランス語科教育法では、教案モデルの研究として、クラス全体

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

でこの Expressions の練習の進め方を詳細に検討することから始める。受講生はまず、別途準備した教案シートに、各段階の作業を「所用時間」「作業の目的」「P(=教員)がすること」「E(=生徒)がすること」「備考(作業を進める上での注意事項)」にわけて書き写し、Expressions で行う作業内容が立体的に把握できるようにする。

次に、フランス語の語彙や表現を日本語を介さずに理解させる手法を研究する。教科書で意味を伝える主な手段となっている「イラスト観察」以外で、日本語で説明を加えずに効果的にフランス語の意味を伝える方法を考えるのが学生の課題である。本来ならば実際の授業を観察して意味を伝える手法の実例分析をするべきところだが、授業では時間の関係で『発見！フランス語教室』を使った過去の模擬授業の録画を活用して授業観察に代えている。受講生は複数の録画された模擬授業を観察し、意味を伝える方法やリピート練習の進め方の具体例を得る。観察記録をもとに特に出来の良い模擬授業の教案をサンプルとして再現したら、説明せずに意味を伝える基本的な方法(ex. 主語+動詞、限定詞+名詞などを意味のユニットと考える、伝え方の例)をまとめたものを目安として配付する。

模擬授業

実際の模擬授業では各受講生が担当したい課を選ぶ。最初に教材研究を行い、学習要素、注意する発音など基本的な学習事項を確認し、日本語で説明せず意味を伝える手段に関する考察(方法と期待される学習効果)を行い、教案例を作成する。担当教員によるコメントを受けた上で教案のブラッシュアップを行い、カードや音声資料などの補助教材を準備する。

模擬授業は2回行う。1回目の模擬授業後に受講生は担当教員と他の受講生から模擬授業の準備(補助教材の使い方、練習の量、など)と実施(指示の分かりやすさ、声の大きさ、アイコンタクトなど生徒役の学生の反応に対する配慮、フランス語の発音など)に関するコメントをもらう。これらのコメントを参考に1回目の模擬授業を録画したのを見て自己分析を行い、改善点を反映させた修正教案を準備、2回目の模擬授業を行う。2回目の模擬授業後も1回目と同様に教員と他の受講生からコメントをもらい、2回目の模擬授業の録画を見て1回目と比較分析を行い、総括として模擬授業の報告書を提出する。

2. 学生による意味を伝える方法の研究

受講生が考案した意味を伝える方法は以下のように大別される。

映像を用いたもの

映像の使い方にはいくつかパターンがあるようである。

パターン1. 教科書のイラストの拡大コピーをボードに貼る

フランス語を発音しながらイラストを活用して意味を伝えるために、受講生はしばしば教科書のイラストをコンピューターに取り込み、拡大したものをボードに貼って活用している。これは7課の村の祭りや友人の家、9課の位置関係(上・下・前・後・～の中)、10課の「過去にしたこと(買い物・食事・電話)」の場面の模擬授業の際に行われたものである。イラストの状況を分かりやすくするため、さらに、イラストを彩色する、話している人物を太線で強調する、9課のようにイラス

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

トに複数の情報が含まれている場合は話題となっている箇所を赤丸で囲むなどの工夫を凝らしている場合が多い。受講生はフランス語の文を発音しながらボードに貼ったイラストの該当箇所を指さすことで、説明せずに音と意味を結び付けようとしている。

パターン 2. 一部を取り出して別のカードやイラストにする

教科書のイラストそのものは使わないが、その一部を取り出してイラストまたはカードにし、Expressions の練習時に活用する例もよく見られる。2 課の parler 「話す」(人が口を開くイラスト)、各国の「言語」(対応する国旗カード)、3 課の「好き/好きでない」(ハートと×印のカード)、6 課の天候・暑い寒いなどの感覚、8 課の靴・電池、バッグなど枚挙に遑がない。この場合、「行為(話す)」や「状態(好き、暑い、寒い等)」は教科書のイラストよりアイコン的なものを使うことが多く、生徒役の学生の意見でもその方が分かりやすいと感じるようである。

複数のイラストやカードを使う場合は活用の仕方にも工夫があり、使用するイラスト類が多い場合、同種類のものにはボードに貼り、単体のイラストやカードは受講生が手元に持ち使用することが多い。例えば 2 課の場合、国旗カードはボードに貼り、人が口を開くイラストカードは受講生が手に持って練習を進めている。

パターン 2 のヴァリエーションとして現物を使う場合もある。これは 8 課の模擬授業で見られたケースであるが、受講生は練習で実際の電池を見せて小型の置時計に入らないことを示しながら (Elles sont) trop grosses と言い、同課の学習事項である trop petit/gros (小さすぎる/大きすぎる) の意味理解に繋げていた。

パターン 3. 教科書のイラストに足りない情報を映像にして補う

教科書のイラストには Expressions のモデル対話に含まれた、あるいは対話の前提とされたすべての情報が表されているわけではない。この場合、受講生は必要と思われる情報を映像にして活用している。例えば 4 課の人物の性格を表す性格を表す形容詞 (gentille, gourmande, drôle 等) についてはそれぞれの性質を象徴するイラストのカードを作り、映像だけでは意味が確定しにくいので、例外的に日本語も添えている。日本語訳は絵カードの下にあり、発音練習の直後に日本語訳を見せて意味を知らせる。6 課の祭りに行く場面では教科書のイラストの拡大コピーに赤色の太い→を添えて「行く」という意味を表していた。8 課では受講生によって異なる情報が補足されており、Expressions 1 の最初の対話の流れを 1 つのイラストに集約するのが難しいと考えた受講生は、「靴を買いたい」と「靴が小さすぎる」という情報を 2 枚のイラストに分け、紙芝居のようにして見せた。一方、靴を買いに来たことを気付かせたい受講生は、靴が並んだ写真、品物の写真を複数貼り、デパートの靴売り場であることを示そうとした。

映像の使用について注意すべき点は、イラストやカードを過度に使用すると失敗するという点である。映像資料は語学の入門段階では便利だが、映像によって伝えられる情報には限界がある。フランス語の大まかな理解に必要な情報を映像によって伝えることが大切である。

ジェスチャーを用いたもの

語学の授業でイラストやカードを使うことはすぐに思いつくが、ジェスチャーを使うという発想はあまり思いつかないようである。それでも指示や複数のものの比

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

較によって情報を視覚化することが可能な要素については、ジェスチャーでその意味を伝えようとする例が見られる。

4課の「小さい/大きい」など対比によって表される形容詞は掌を下に向けた状態で手を自分の背丈より上に挙げることで「大きい」を、手を自分の胸あたりまで下げることによって「小さい」を表している。程度や時間の長さを表す副詞「とても (beaucoup)」(3課)「少し (un peu)」(4課)「ずっと (longtemps)」(10課)もジェスチャーで表されることが多い。「少し」は親指と人差し指で小さいものをつまむような仕草をして表し、「とても」「ずっと」は合わせた両掌を横に開く動作によって程度や量が増加していることを表している。もう少し進んだ例としては、8課の *Je voudrais des chaussures.* という文の内容を靴の写真+ジェスチャーで表そうとしたケースがある。担当した受講生は、フランス語の文を発音しながら靴の写真を指さし、次にその指を自分の胸に当てて、「靴が欲しい」という意味を伝えようとした。いずれの例についても、ジェスチャーは単体としてではなく、映像情報の補足的手段として使われるようである。

3. 模擬授業の実際

上記の方法を活用して Expressions の模擬授業を行う場合、基本的なリピート練習や補助教材の事前準備を入念に行い、全体の流れをみて必要な作業を補足することが必要となる。以下、主な必要事項を記しておく。

テーマの導入

「イラスト観察」を Expressions の練習プロセスに取り入れられない場合、多くの受講生は短い導入作業を加えてテーマを分かりやすく伝えている。例えば2課を担当した受講生は人が口を開くイラストカードを持ち *Je suis japonaise. Je parle japonais.* と切り出して模擬授業を始めた。3課でも同様に、模擬授業の始めに、受講生はハートと×のついたカードを手に取り、*Moi, j'aime beaucoup le chocolat, mais je n'aime pas les tomates.* と導入作業を行っている。4課では、有名人の写真を貼り、受講生がジェスチャーを交えながら *Akebono est grand. Il aime manger. Ayumi Hamasaki est petite. Elle aime chanter.* と人物を紹介し、その後、日本語で課の学習テーマが人の描写であることを告げた。いずれも、映像やジェスチャーを活用しながら、既習事項やテーマに繋がるその課の学習事項を分かりやすい文例にして、学習者に印象付けようとする意図が見られる。

リピート練習

日本語による説明を加えずに、フランス語の文を発音しながら意味を伝えるためには、リピート練習の仕方も大切である。オーラル中心のフランス語のリピート練習では文をチャンクに区切り、意味の塊をリピート練習した前の部分に付け加えながら文の後ろの部分からリピート練習を行い、最後に文全体を発音させるバックアップ・テクニックを用いるのが一般的である。例えば、4課の *Céline est petite. Elle est gourmande. Elle aime beaucoup le chocolat.* については、*petite / petite / Céline est petite. gourmande / gourmande / Elle est gourmande.* と人物描写にあたる形容詞を2度リピートした後に全文をリピートする。形容詞をリピートする時はジェスチャーやカードを使い、発音しているフランス語の意味に気付かせる。9課の *Où est Lise ? Elle est*

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

devant le château.であれば、対話の後半を le château / devant le château / Elle est devant le château.のように区切り、意味のポイントに相当する château や devant le château の箇所イラストやカードを指さして音と意味が結び付くように誘導する。バックアップシステムは、文のイントネーションをかえることなく、リピート練習が行えるが、さらに、新出語彙や意味理解のポイントになる表現をクローズアップしながら何度も発音でき、意味を伝える作業にも結び付けやすい²⁾。このように細かく区切って意味と結びつけながらリピート練習を行うと、対話の音読作業の前に文の意味を確認する必要はほとんど感じないようである。

なお、このようなリピート練習をする場合、簡単な単語でも発音を確認しておくこととモデル文を完全に暗記しておくことは必須条件である。イラストやカードを扱い、さらに場合によっては音源の操作をしながら、生徒役の受講生に口の動きが見えるようにリピート練習を行うことは、それほど単純な作業ではない。受講生のリハーサルが足りない場合、しばしばフランス語の文を覚えていなかったり、自信のない単語の発音がはっきり聞こえなかったり、音源の操作に気を取られて作業が滞るなどの失敗が起こる。

作業上の工夫

その他、受講生が取り入れた細かい作業上の工夫として、次のようなものが上げられる。

映像資料を実際に使用する時は、事前に模擬授業全体のシミュレーションを行う必要がある。使用するイラストやカードが多い時は、基本的なイラストは最初からボードに貼っておく、途中でボードに貼るカードには裏にマグネットを付けてスムーズに作業ができるようにするなど、細かい作業をしておく、模擬授業の際に作業の手間を省くことができる。音源を使ってリピート練習する際は、同じ文を複数回リピートする作業がスムーズに進められるように、録音を授業用に加工（同じ文を複数回録音する、ポーズの時間を計算して録音するなど）しておく、音源の操作に気をとられることがないので、フランス語の発音、イラストやカードの活用など基本的な作業に集中できるようである。Expressions の練習の最後に対話文を音読する際には、対話を模造紙に書いたものをボードに貼り、フランス語を発音しながら指棒で綴りをなぞるといった作業を取り入れた受講生が多かった。これは、生徒に前を向かせ、綴りと音を一致させるためであるが、リエゾンの印やポイントになる語彙・表現の色を変えることもできるので、効果的だと思われる。

以上、フランス語科教育法の模擬授業で試みられた数々の方法と工夫を紹介した。『発見！フランス語教室』で Expressions(1)(2)に割り当てられた練習時間はそれぞれ 10 分間であるが、受講生は数時間に及ぶ準備を行ってこの 10 分間の模擬授業に臨んでいる。試みた方法が必ずしも成功するわけではないが、その涙ぐましい努力と創意工夫にはしばしば頭が下がる思いであったことをおわりの言葉としたい。

注

1. 表現形式の確認はExpressionsの次の段階のpour découvrirで、言語形式の解説はその次段階のpour réfléchirで行われる。
2. リピートの方法については特に指定しているわけではなく、前から区切るリピート方法を採用する受講生も多い。